

## 「般若経」における abhāva の用法

渡 辺 章 悟

〔序〕四無等によって知られる非存在 abhāva の概念はインド思想において認識論及び存在論上の重要な問題であり、仏教でも『涅槃経』や『瑜伽論』等の経論に取り上げられている。しかし、「般若経」における abhāva の概念はこれらとは異なった、独自の意義と用法を持っている。本稿では特に『八千頌般若』AS と『二万五千頌般若』PV とを中心として、「般若経」の思想的展開に伴ってこの概念がどのように変化したのかを解明したい。

### I 『八千頌般若』における ABHĀVA

AS 中の abhāva の用例 (11回) は他の否定概念と比べてそう多いほうではない。しかもこれは梵本と西藏訳に拠ったものであり、漢訳では古い訳本ほどさらに少なくなる。その詳しい検討は他の機会に譲り、本稿ではそれらの用例を分類した結果のみを簡単にまとめ、AS における abhāva の意味を明確にする。

まず用法から整理すると、〔1〕他の否定概念と並列的に列挙される。〔2〕abhāva-gatika あるいは abhāva-svabhāva という複合語として単独で用いられる。〔3〕対立概念 bhāva とともに bhāva-abhāva-apagata という複合語となる。以上の三類型を便宜上〔1〕「並列型」、〔2〕「単独型」、〔3〕「二句型」と呼ぶ。この中では「並列型」が七例を数え最も一般的といえる。それに対し「単独型」は三例のみで、そのうち abhāvagatika が二回、abhāvasvabhāva は一回の例外的なものである。さらに「二句型」はただ一回のみの特例で、第二回の「単独型」に含めてもよいのだが、PV との比較のため敢えて分類したにすぎない。

〔1〕「並列型」の代表例：「空であるものは無尽であり、空性は無量性でもある。これらの事物に意味上の区別は認められない。これらは言説 (abhilāpa) なのである」といい、以下に「無量、無数、無尽、空 (śūnya)、無相 (ānimitta)、無願 (apraṇihita)、無作 (anabhisamkāra)、不生 (anutpāda)、不起 (ajāti)、非存在 (abhāva)、離欲、滅、涅槃」が併記される。そして、「それは教説を完成させるための説明である (deśanābhiniṛhāranirdeśa eṣaḥ)」。さらにそれは「すべての事物にある性質 (sarvadharmāṇām dharmatāḥ)」であり、「言葉によって表現できない (anabhilāpya)」ともいわれる<sup>1)</sup>。(つまり、無量以下の非存在などを含む概念は事物の性質であるが、それは教説を完成させるために如来が仮に説いたものであり、すべてのもの

は不可説なのであるとする。これは二諦の語こそないが、正しく二諦説の萌芽として注目されよう。)

他の例でも「真相 (tathatā) の特徴 (lakṣaṇa)」として上げられたり、法界や涅槃と並記されることがほとんどで、その意義に変わりはない。ただし、注意しなければならないのは非存在 abhāva は「空性・無相・無願・無作・不生・無起・非存在」という三三昧をはじめとする一連の術語と並列され、しかもこの七つの概念の順序と数が基本的に固定していることである。これらを基本としてその前後に無量、無数、無尽、不染 (asaṃkleśa), 不浄 (avyavadāna), 離欲, 離脱 (viveka), 虚空 (ākāśa), 法界, 涅槃, 実際などが付加されてゆくのである。これら一連の並列語は般若波羅蜜と結び付いた甚深な (gambhīra) 境地をいう同義語ともされているが、『現觀莊嚴光明』AA では「甚深であるというのは修道が甚深であるという意味である」といい、続いて空性以下の一連の術語をそれぞれ注釈する。その第七番目に、「見道で対治されるものを欠いているから abhāva である。修道で対治されるものが離れているから virāga である<sup>2)</sup>」とする。このようにハリバドラの解釈は、abhāva を見道の状態と結び付ける点で注目される。漢訳の状況から言うと、これらの並列語のなかで abhāva は『道行』『大明度』といった古訳には相当語訳を欠く。竺法護の『鈔經』(265-)、羅什の『小品』(408)さらには玄奘の『大般若』(660-663)に至って漸く「無所有」「非有」「無性」の訳語が現れるのである。このことから並列型における abhāva という語は初期の AS にはなかった可能性が指摘される。

[2] 次に「単独型」の abhāvagatika の用例を検討する。これは二例のみであり、しかも一つは「一切のものは虚空という状態 (ākāśagatika) である。同じ様に空性・無相・無願・無作・不生・無起・非存在などの状態であり、その状態を越え出ることはない<sup>3)</sup>」というもので、実際は「並列型」に含められる。もう一例は「(無漏の) 心は非存在という状態 (abhāva-gatika) にあり、充足がないのである<sup>4)</sup>」という文脈で用いられる。これは AA によれば[1]と同じく見道における煩惱などの無の状態、ということで、「無漏の心とは見道の修習で捨てられる煩惱がないという結果 (abhāva-paryavasāna) である<sup>5)</sup>」と注釈する。漢訳は『小品』(無所有)あるいは『大般若』(無自性、無性)に至って訳語がみえる<sup>6)</sup>。

もうひとつの abhāvasvabhāva という複合語は AD や PV, 特にその後半に頻出する無自性の原語の一つだが、一般的な asvabhāva に対して「無を自性とする」という肯定的無自性表現である。しかし、この二つの言葉には厳密な区別

はなく、同一のテキストの中でも混用されたり、写本間で異なっていたりする。しかも **AS** と **AD** の abhāva と asvabhāva が、**PV** へと増広される過程で abhāvasvabhāva へと変換される傾向があることも証明されている<sup>7)</sup>。その abhāvasvabhāva の **AS** における唯一の用例がこれである。(漢訳では『大般若』第四会に至って「無性為性」の訳語をみるのみ<sup>12)</sup>。)

**AS** では「(衆生の) 心は自性として解脱しているものであり、“無を自性としている” (svabhāvavimuktāni ... tāni cittāny abhāvasvabhāvanī)<sup>8)</sup>」といい、これが般若波羅蜜に至った如来によって如実に知られることが述べられる。ハリパドラによれば「(縁起などのような) 規範に従った生じ方でないものだから、心は自性として解脱しており、現に存在していないという在り方を形質としているから (avidyamānasattārūpatvāt) 無を自性としている<sup>9)</sup>」とする。さらに、**AS** の別の箇所でも「事物は現に存在しないというように存在しており、そのように存在していない<sup>10)</sup>」といい、それに対する **AA** の注釈「現に存在しないことこそが存在していることである<sup>11)</sup>」にもうかがえるように、この用法は事物に執着する衆生の在り方を否定し、真のものの在り方を説く「般若経」特有の否定表現の一つである。しかし、このような考え方から abhāvasvabhāva という表現に辿り着くには、**AD** あるいは **PV** が成立するまで待たねばならなかった。

[3] 最後は存在と非存在の二句否定と言う意味で「二句型」に分類した用例である。それは、「如来の真相と全てのものの真相は全く同一の真相であって、存在や非存在の多元性を離れたものである (aneka-bhāva-abhāva-apagata)<sup>13)</sup>」というもので、「並列型」では abhāva は真相を意味し肯定されていたのに対し、ここではそれに対する bhāva とともに否定されている。つまり、単一性に対する多元性と同じく相対化され否定されるのである。この用法の abhāva は **AD** や **PV** になるとかなり頻繁に用いられるようになる。しかし **AS** ではこの例のみであり、しかもすべての漢訳に訳語を欠いている。したがって、これは現存の梵本とチベット語訳の系統にのみ伝わる新しく書き加えられた用法であるとみなしうる。

以上、その初期において用いられることがなかった **AS** の abhāva は、漢訳の『鈔経』あるいは『小品』の原本が成立する頃から **AS** に取り入れられ「並列型」でみたように次第に法相化されてきた。そして『大般若』に至って漸く現存の梵文テキストに近い訳語を持つようになる。一方、法相化という流れに対し「単独型」「二句型」という新しい用法も生じていた。特に「二句型」はそれ以外の型が肯定的に用いられるのに対する反省的思惟が働いて改変されたものと考

えられるが、これは漢訳からみるとまだ確定的な用法にはなっていなかった。また、これら梵本を含めた AS 系諸本において、abhāva の概念はそう重視されることはなかったし、後述するような無自性との結び付きがまだみられなかった。

## II 『二万五千頌般若』における ABHĀVA

PV における abhāva は枚挙に暇がない。しかし、その用法は AS とは異なり「並列型」の増広はほとんどなく、その代わり「単独型」それも abhāva のみで文字通り単独で用いられ、＜一切諸法＝abhāva＞といった肯定的用法が多くなる。例えば「もし菩薩摩訶薩が般若波羅蜜を実践するならば、六波羅蜜・五蘊・三十七菩提分法、乃至十八不共仏法が abhāva であると知る。」「abhāva は色の自性である。…蘊・処・縁起の自性である。…乃至、存在の限界 (bhūtakoti) の自性である。」「abhāva は菩薩摩訶薩の道 (mārga) である。abhāvaこそが現観であると知るべきである。」「もし私が無上正等覺を現等覺しようがしまいが、abhāvaこそがすべてのものなのである<sup>14)</sup>。」といった類いである。

また、「abhāvaが無為である<sup>15)</sup>」というものも目につく。この例の一つに「無為のものそれは非存在であり死滅である。このようにすべてのものが無自性であるのは何かが消え去ることによるのではない」(yo'samskrtaḥ so'bhāvaḥ kṣayaś cānena … paryāyeṇa niḥsvabhāvaḥ sarvadharmā na kasyacid vigamena)<sup>16)</sup> というのがある。これは関係代名詞 yad … tad で結ばれた用法で、AD と PV にはしばしばみられる。本稿では便宜上これを「定形句型」と呼ぶこととする。「定形句型」は多くの場合、先行詞 yad で規定するものは無自性であり、それを受ける指示代名詞 tad が abhāva を説く。例えば次の通りである。

“yasya ca svabhāvo na samvidyate so'bhavo/ na cābhāvo 'bhāvena śakyah pariñamayitum/”(K, p. 135, 1. 16); “nāsti… sāmyogikah svabhāvaḥ/ yasya subhūte sāmyogikah svabhāvo nāsti so' bhāvaḥ/”(T. MS, 386b<sup>1</sup>); “na hy asya svabhāvo' sti yaḥ samyujyeta vā visamyujyeta vā/ yaś ca-asvabhāvaḥ so'bhāvaḥ/ yaś ca-asvabhāvaḥ so'bhāvena sārddham na samyukto na visamyuktaḥ/”(T. MS, 372b<sup>2</sup>).

その他、AS における「単独型」の一つとして言及した abhāvasvabhāva は、上述のような「定形句型」の意味する「自性がないもの、それが abhāva である」という無自性表現の言い換えに他ならないが、この語が PV に至って頻出することについては既に述べた。

次に「二句型」の検討に移る。これは、「仏は仏眼によって三千大千世界を觀察して、存在を認めることもない。ましては非存在をや。…存在であると認めら

れないのに、非存在であると認められはしない」としたり、「およそどのようなものであっても生ずることもなく、滅することもなく、汚れることもなく、浄化されることもなく、それらのものは減ることもなく、増えることもなく。来ることもなく、去ることもなく。集積したものでもなく、存在しないものでもない (na rāśir na-abhāvah)<sup>17)</sup>」というように対立概念とともに否定される二句否定の用法である。この類例も **AS** に較べてかなり増加している。

この他、**PV** 特有の用法の一つと考えられるものに、「二句型」の発展形態と見られるものがある。それは、「どうして以前に有 (bhāva) となったものが、後に無 (abhāva) となろうか」に続き “nātra … bhāvo nābhāvo na svabhāvo na parabhāvah/ kuta eva svabhāvaśūnyatā bhaviṣyati/<sup>18)</sup>” と、四句否定が説かれるもの、あるいはまた、男・女や有為・無為といったあらゆる法相を代表するものとして “bhāvakuśalo’bhāvakuśalaḥ svabhāvakuśalaḥ parabhāvakuśalaḥ/ … sa bodhisattvo mahāsattvaḥ pratikāṅkṣitavyaḥ/<sup>19)</sup>” といったもので、ここでは仮に「四句型」となづける。これは厳密には「有と無」「自性と他性」という二組の二句からなるものである。しかし、二十空の最後の四空 (bhāva-śūnyatā, abhāva-ś., svabhāva-ś., parabhāva-ś.) がそうであるように、一つのまとまりと見なしうる<sup>20)</sup>。

また、次のような存在と非存在の二項による四句もある。「①存在は存在によって現等覚できない。②存在は非存在によって現等覚できない。③非存在は非存在によって現等覚できない。④非存在は存在によって現等覚できない<sup>21)</sup>」。

このような「四句型」の類例の大部分は最初の囑累品以降に説かれているため、初期の **PV** には含まれていなかったことが分かる。その例外としては二十空の中の四空がある。しかし、二十空を定義する箇所が問題を孕んでいることは、つとに論じられていることである。おそらく四空は別の思惟のもとで形成され、後からここに付加されたものであって、本来 **PV** は十八空を説いていたものであることは既に明らかになっているとおりである<sup>22)</sup>。二十空説は後の中観派や瑜伽行派の論書に十六空と四空として伝持されてゆくが、むしろナーガールジュナの『中論頌』〈15-1~6〉〈21-12〉〈25-8〉における自性などの考察こそが **PV** におけるこれらの増広に影響を及した可能性もあろう。いずれにせよ、「四句型」の用法は **AS** にはみられず **AD** や **PV** の増広過程、しかもその後期において導入されたものであることを指摘しておく。以下略。注の用意あり。

＜キーワード＞ 非存在, ABHĀVA, 般若経, 四句否定

(東洋大学大学院修了)